

---

## こちら地球統合軍

poo

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こちら地球統合軍

### 【Nコード】

N5440M

### 【作者名】

p o o

### 【あらすじ】

学会は色めき立っていた。次元をわたる技術の発明。御伽嚙のようなことだがついに成功したのだ。そして新たに確認された通称フオトンなる物質フォトンエネルギーはクリーンかつ大出力なエネルギーとして注目を集めた。しかし次元世界に乗り出すに当たって逆も考えなければならなかった。地球を侵略から守る軍隊。今地球はひとつになるときがきた。

## 統合軍誕生（前書き）

書くのが遅れて、キーワード見ると劣化コピーにしかみえないorz

## 統合軍誕生

### 統合軍誕生

学会を大騒ぎさせた次元航行技術の発明とフォトンの発見は今世紀最大の科学革命としていまでもその業績を超えることが科学者たち老若男女問わずの夢である。その学会の翌年次々と次元航行艦が建造され始めた。その中いち早く建造されたのが「次元航行戦艦ヤマト」である。しかし国際的取り決めにより全ての主要国が一隻ずつ最低就役しない限り次元世界には繰り出せなかった。その間ヤマトは宇宙を探索し続けたのである。

そしてその三年後遂に主要国かく次元航行艦がそろいここに地球統合軍が成立したのである。最古参の次元航行艦ヤマトが旗艦である。それにはわけがあつた。日本が独自開発し唯一ヤマトに載せられている波動エンジンである。他国のフォトン増幅型エンジンや核融合エンジンよりも安定かつ高出力であるからだ。ただコストが高く戦艦大和を再利用したヤマトに搭載されているに過ぎないのである。

提督辰巳剛三、この男の名を地球で知らぬものはなしと言わしめたほどの豪傑である。

今男は統合軍本部の総司令官室の席に深々と腰を沈めている。眼光は鋭く。ひげをたくわえた顔は年齢を感じさせるがその肉体は軍服の上からでも分かるほどの逞しさだった。

齢56のこの男はヤマト艦長の任も負っている。当初ヤマトの実力を疑問視する人々が当時就役していたアメリカ、ロシア、EUの次元航行艦全艦と対戦してみろという無理難題を吹っつけたときも総勢十二隻の艦隊をヤマト小破という結果で殲滅したのである。その実績により現在彼はこの席に座っている。人は彼を「軍神」、「奇跡の男」と呼ぶ。

この物語はこの還暦近い老提督の物語である。

## 統合軍誕生（後書き）

すこしずつ暇があつたら書きます。

## 設定

### 次元航行戦艦ヤマト

全長 265.8 m

全幅 34.6 m

全高 77.0 m

基準排水量 62000 t

主機波動エンジン

補機小型フォトン増幅型エンジン×2

武装艦首収束型六連装波動砲

三連装 48 cm 劣化オリハルコン砲

煙突ミサイル8セル

艦首魚雷発射管前部×3 後部×3

両舷側ミサイル発射管×16門

連装対空パルスレーザー砲多数

4連装対空パルスレーザー砲多数

側面機雷投射機

波動爆雷投射機

### 艦載機

烈風×30

全長 17.0 m

全幅 8.2 m

全高 3.2 m

総重量 18.5 t

武装 35 mm パルスレーザー機関砲 8門（機首）

20 mm 実体弾機関銃 10門（翼内）

500 kg ステルス対艦魚雷×2（翼下）

## 次元航行戦艦アンドロメダ

全長 287.8 m

全幅 45.9 m

全高 87.5 m

基準排水量 82500 t

主機核融合エンジン

補機小型フォトン増幅型エンジン×2

武装艦首収束型フォトンブラスター

三連装 40 cm パルスレーザー砲×2

艦首ミサイル 8 セル

艦首魚雷発射管前部×3 後部×5

両舷側ミサイル発射管×18 門

4 連装対空フォトンガトリング砲多数

側面機雷投射機

## 艦載機

烈風×35

## ユーラシア級次元航行艦

全長 223.8 m

全幅 35.9 m

全高 79.5 m

基準排水量 42500 t

主機大型フォトン増幅型エンジン×1

補機小型フォトン増幅型エンジン×2

武装三連装 20 cm フォトンカノン×4

艦首ミサイル 12 セル

艦首魚雷発射管前部×2 後部×5

両舷側ミサイル発射管×10 門

4 連装対空フォトンガトリング砲多数

側面機雷投射機

## 設定（後書き）

ひとまずヤマトから随時増やしていきます

## ジュエルシード襲来（前書き）

この作品ふで進まない

## ジュエルシード襲来

ジュエルシード襲来  
ヴー！ヴー！

「管制室より統合軍地上本部へ通達。正体不明の未確認エネルギー体が大気圏を突破し日本国海鳴市に落下した模様。至急回収し地域の安全を確保してください」

統合軍始まって以来の出来事だった。未確認エネルギー？フォトンでも波動エネルギーでもその他の既存のエネルギーと異なる存在ということだ。

「このことで艦隊が出動することはない。優秀な地上に任せておこう」

そう思っていたが数日の時間が経過して戦果はそれなりだった。未確認エネルギー結晶体は全部で二十一個ということだったが回収したのは全部で8個。しかも非公式に回収して回っている輩がいるらしく現在大怪我や死者はいないものの人的被害は下級士官が12名となり少将クラスの人員の投入が始まったそうだ。そのときだった。

「レーダーサイトに未確認艦を捕捉」

「アンドロメダが静止勧告を出しています」

「とうとうくるべきときがきた」

「こちらは地球統合軍第二艦隊旗艦アンドロメダだ。貴艦は我々の領界を侵犯している。ただちに静止し所属と目的を答えなさい」

「私たちは時空管理局次元航行艦アースラです。危険物・・・ロストロギアと呼ばれるものがここにばら撒かれたとあって回収に来ました」

「ここは我々の世界だ。すでに我々は回収を始めている。お引取り願いたい」

「わたしたちも仕事なのでそういうわけにも行きません。なので私たちがあなた方の回収のお手伝いをするという形を取らせていただけますか？そうすればあなた方による回収もなせるし私たちも仕事をしたといって帰ることができます」

「分かった。だが私の独断では決められない。トップに掛け合おう」

「なに？協力を申し出てきた？分かった地上と相談してみる」  
そして地上の総司令官チャールズ・グラッドストンとの話し合いの結果協力を了承することになった。

「こちら地球統合軍艦隊総司令官辰巳剛三だ。貴官のもうしでありがたく受けさせてもらう。だが、何か不審な行動があれば容赦なく射殺及びアースラの撃沈をする用意があることをゆめゆめ忘れないよう」

「分かりました」

こうしてはじめての次元世界との接触は協力体制ということになった。

## ジュエルシード襲来（後書き）

みじかい

## アースラ危機（前書き）

久しぶりにこれ書くな

## アースラ危機

### アースラ危機

次元航行艦アースラは現地第九十七管理外世界の組織地球統合軍との協力体制をしいていた。

「一時はどうなるかと思ったけど現地組織と協力できてよかったわ」

リンディはため息をついた。

「そうですね艦長。しかしジュエルシードをばら撒く原因をつくったやつを早く捕まえないと・・・！！！」

「ヴー！！ヴー！！」

「なにがあつたの！！」

「敵襲！！未確認の次元航行艦を多数確認！！砲撃されています！！アースラ単艦で対処は不可能です！！」

「統合軍に連絡を！！タイミングから考えて敵の狙いはジュエルシードです！！」

「統合軍より増援を送るとの連絡が入りました！！あ！通信です。繋がります！！」

「こちらアースラです！増援感謝します」

「こちら統合軍第二艦隊旗艦アンドロメダだ。一番近い艦隊が我々だったのだ。遅くなって申し訳ない」

「いえ、来ていただけて助かります」

「これより援護を開始する」

「総員対艦戦闘用意！」

アンドロメダ艦長エーミツ・ライスバーグ少将が艦内で声を張り上げる。

「主砲照準あわせ！！目標敵艦隊の先頭だ！！撃ち方はじめ！！」

アンドロメダの40cmパルスレーザー砲が火を噴いた。

「潜水艦隊敵艦隊に魚雷をお見舞いしてやれ！！」

突如にもないはずの場所から魚雷が飛び出てきた。

「敵艦隊はなにやらエネルギー場で防御しているようです」

「よしわかった！！とっておきをお見舞いするぞ！ユーラシア級に時間を稼がせる！」

対艦ミサイルで援護をしていたユーラシア級次元航行艦が主砲の20cmフォトンカノンの射程に敵艦隊をおさめるべく前進を開始した。

「補機艦首砲塔へ接続エネルギーチャージ開始」

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、総員対ショック対閃光防御！！」

「高出力フォトンブラスター発射！！！」

アンドロメダの艦首から迸った光の帯が敵艦隊に突き刺さり爆ぜた。

「敵艦隊消滅を確認。アースラとともに帰投する」

初めての他世界の次元航行艦との戦いはアンドロメダ率いる第二艦隊の圧勝に終わった。

## ユゲドラシル（前書き）

ほかの作品書いてたけど先にこっちが書きあがった

## ユグドラシル

### ユグドラシル

アースラは損傷部分を応急処置をするために統合軍のドッグに入っていた。

「さすがに機関のほうは自力でやってもらはないといけないけど装甲は何とかしておくよ」

田村喜美整備士長が工具を片手にいった。

「いえ。ここまでしていただけるだけで感謝です。そのぐらいは自分たちで何とかしましょう」

クロノ・ハラウン執務官は言った。現在アースラはドッグにながった状態ながらさきほどの艦隊の情報を解析していた。

「この艦隊は！ーやっぱり・・・艦長、先ほど襲撃してきた艦隊はおそらく第35管理外世界の旧式艦艇です。しかも旧式といってもいまだ地方艦隊では現役でさきほどの艦隊も正式な軍所属の艦艇と識別信号のパターン外見ともに一致しました」

「まずいわね・・・このことが原因で戦争に発展したら」

第35管理外世界、強大な軍事力を持った軍事大国とも呼べる次元世界で管理局も派遣した艦隊が尽く撃退され損耗が馬鹿にならないために管理外世界という形で不干渉とした世界なのである。リンデイが今後の事態を考え頭を抱えている頃統合軍本部最深部にある場所でアースラという異質な技術に興味を持ったものがいた。

（なに、これ？地球のものじゃない）

興味がわいたのでまずはアースラのシステムを調べ始めた。

（魔法・・・おもしろいな。私、もっと知りたい）

それはアースラのシステムから通信回線を密かに乗っ取りミッドチルダの管理局のデータベースへとその手を伸ばしていった。そし

て面白そうな技術や情報などを根こそぎ複写した。

（今日はこのくらいにしよう）

なぜなら彼女には新たな用事ができたからである。

（もつと私は知りたい。情報だけじゃなくて人間みたいに目で見て耳で聞きたいな）

この彼女、統合軍の情報処理の中核である「自立発展型人工知能ユグドラシル」の行動が明るみにするのはもう少し先のことになる。

### 第三十五管理外世界にて（前書き）

超短いです

## 第三十五管理外世界にて

第三十五管理外世界にて

第三十五管理外世界の会議室は紛糾していた。

「まったく地方艦隊の方々はなにをやっておられるのかな？管理局を追い詰めておきながらノーマークの管理外世界の艦隊にやられて壊滅するなど情けない」

「なにを！あなた方中央艦隊の優秀な方々はあの艦隊に勝つ自信が  
おありなのですか？」

その後も司令官同士の言い合いが数時間続いたそのときだった。

「控えよ。見苦しい」

「「閣下！！し、失礼いたしました！！」」

そこには軍服を着た壮年の男が立っていた。

「その第九十七管理外世界・・・地球といったか。その艦隊との戦闘の映像しつかり見させてもらった」

「ふがないものをお見せして申し訳ありません閣下！！」

「よい。あの艦隊には私が直々に戦いを挑もう」

「閣下。その役目私が果たしとうございます」

そう中央艦隊の司令官が言った。しかし

「ならん。これはすでに私の意志で決定されたものだ。三日後に私が艦隊を率いて地球へ攻め込む」

「・・・承知いたしました」

若干不満げながらも中央艦隊の司令官は了承の意を表した。

「待っている。地球の諸君」

この男こそが後の統合軍最大のライバルとなる男第三十五管理外世界ガントレイズ帝国総統ベラス・マルトレイユであった。

## 対策会議（前書き）

正直作品を書いていて先行きが見えない

## 対策会議

### 対策会議

統合軍本部では合同会議が執り行われていた。

「まさか、異星人よりさきに異世界人と戦うことになるとは・・・」

「しかし、何よりも脅威なのはこれではないでしょうか？」

そういつて技術開発局解析部部長がスクリーンに表示したのはアンドロメダのパルスレーザーが防がれている映像だった。

「ご覧のように通常兵器ではトップクラスの破壊力を誇る40cmパルスレーザー砲がバリアと思われるもので防がれているのがわかります」

その映像に少し会議上がざわめく、一応報告を受けていたものの実際に見るまでは心のどこかに信じていない気持ちがあったがあまりに衝撃的な映像にそんな気持ちもどこかにいつてしまった。

「しかし、これをどうすればいいのだ・・・」

そう誰かが呟いたときだった。

「こんなこともあるのかと!!」

その叫び声にみなが会議室の入り口に目を向けるとそこには技術開発局局長敷島愛華（35歳独身）がいた。

「敷島君なにかあるのかね？」

「もちろんでい!!」

「君の態度とかには色々言いたいことはあるがとりあえず報告を」

「はい。相手がシールドを持っているのだからこちらも付けければいいじゃないか!!ということとで艦載型エネルギーシールドを開発いたしました」

「それは仕事が早いな・・・相手のシールドの対策はとりあえず置いておいて全艦艇へのシールドの搭載を急がせるとしよう」

こうして全艦艇の改修が行われたのだが、その最中に問題は発生した。敵艦隊襲来・・・その知らせは瞬く間に統合軍中を駆け巡り大騒ぎになった。それもそのはず主力艦艇のほとんどが改修中なのだ。なぜこのようなことになったかという不幸にも統合軍のドッグは一斉に改修を行うことができる数と大きさがあつたために早めに済ませてしまおうということになったからである。

「大和を発進させる」

辰巳総司令官が決断を下した。

「いくら大和でも危険です！まだシールドを搭載していないんですよ！？」

そうアースラを入れているドッグは使えないため大和はドッグ入りが後回しになっていたのだ。

「有志を募り迎撃に当たる」

「な！民間を、軍事会社を使うと？」

「ああ。そうだ」

「分かりました。オープンチャンネルを使います」

そして地球上のすべてに放送で呼び掛けた。

「我々は今、異世界からの侵攻を受けようとしている。情けないことに今、こちらの不手際で迎撃には大和しか出ることができない・・・そこで、もし君たちにその意思があるのなら」

そしていったん息を大きく吸い込み大声で続けた

「己が翼に誇りを持つ者たちよ、大切なものを守るための刃を持つのなら・・・全員大和についてこい！！！」

そして宇宙へと飛び出していく大和を追いかけるように宇宙船が発進していった。

## 対策会議（後書き）

台詞はばくってきました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5440m/>

---

こちら地球統合軍

2011年5月16日01時49分発行